

大阪府立大学工業高等専門学校 正会員 ○藤長 愛一郎
 大阪府立大学工業高等専門学校専攻科 学生会員 大谷 真史
 摂南大学 理工学部都市環境工学科 正会員 澤井 健二
 ねや川水辺クラブ企画委員 上田 豪

1. はじめに

昭和30年代、40年代に整備された都市河川は、大雨の際に洪水を防ぐことを第一に整備されたため、護岸は、コンクリートによる三面張りでも急勾配になり、川は人が近づける様なものではなくなった。しかし、近年、都市河川を排水機能だけでなく、地域の水環境として、自然があり、人々の憩いの空間とする需要が高まっている。このような背景の中、寝屋川市では、市民が参加して水辺を創造するという取り組み「寝屋川ワークショップ」が2001年から始まり、2005年には駅前せせらぎ公園、2007年には茨田樋遺跡水辺公園が整備された¹⁾。2009年には、あまり使われなくなった古い都市計画公園を大阪府警の官舎を新築する際に取り壊し、住民らが設計段階から参加し、その意見に基づいた親水公園が完成したので報告する。

対象となったのは淀川水系の一級河川である寝屋川で、大阪の代表的な治水中心の都市河川である。完成した親水公園の幸町公園は、大阪府寝屋川市の寝屋川上流に位置する。

2. 住民参加による親水公園計画

2.1. 市民参加のワークショップ

この親水公園を設計するにあたり、計画段階から、住民の考えを聞くための、ワークショップ（寝屋川再生ワークショップ）を2005年3月から2008年3月まで6回にわたって開催し（図1参照）、設計にはこのワークショップによって挙げられた住民の考えが反映された。



図1 子供の会ワークショップの状況（寝屋川市立中央小学校にて）

2.2 住民の要望に応えた治水機能

寝屋川にワンドをつくり、そこに歩いて降りられる様にしたいという住民の要望に応えるために、水際まで降りられる様に緩やかな坂にした。一方で、降雨時の増水にも対応するために、公園の中に堤防を二段階とし、下段は公園の中に盛土で広場をつくり、上段は既存の堤防と同じ高さとし、まれな高水位にも対応できる様に設計された。

3. 施工後

3.1 施工後の状況

寝屋川幸町公園の施工前と施工後の写真を図3に示す。施工前は堤防が急なコンクリート護岸のため、人が降りていける様な状態ではなく、またそういう想定でなかった。しかし、施工後は、片側のコンクリート護岸が取り除かれ、ゆるやかな斜面の堤防になっており、子供が歩いて降りていけるようになっている。

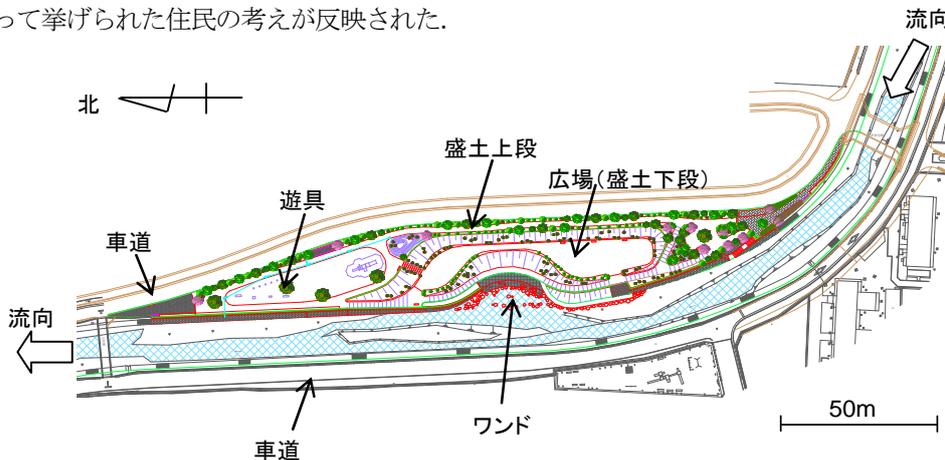


図2 計画した幸町公園の平面図



↓ 施工後



図3 寝屋川幸町公園の施工前と施工後
(南側から撮影)

3.2 アンケートおよびインタビュー調査

2009年の秋に、幸町公園に訪れた人20人に対してアンケートおよびインタビュー調査を実施した。川で水遊びしにくく、きたないという結果が多かったが、半分ぐらいの人が満足していた。これは公園の広場や遊具なども含めた結果であると考えられる(図4参照)。

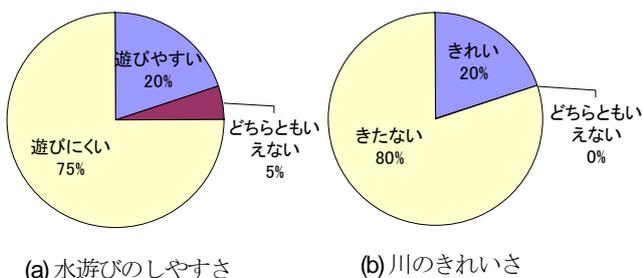


図4 公園に遊びに来た人へのアンケート結果(2009)

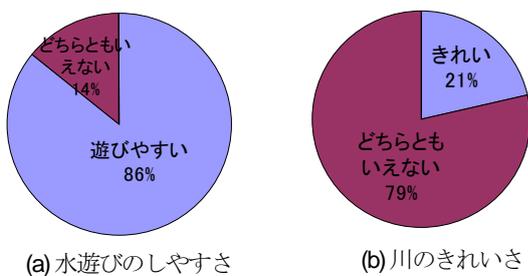


図5 水辺に遊びに来た人へのアンケート結果(2010)

「水のきれいさ」できたないと答えた人は、草木が茂っていることをいう人が多かった。また、「水遊びのしやすさ」で水遊びしにくくと答えた人の半数は水がきたないと答えた。よって、満足度を得るためには、水質を向上するというよりも、無造作に大量に生えている草木の量を制限させることが有効であると考えられる。

一方、2010年8月に幸町公園の水辺を利用することを目的としたイベント「幸町公園水辺のつどい」で14名にアンケートした結果を図5に示す。水辺で遊びやすいと答えた人が86%で遊びにくいと答えた人は0だった。また、川のきれいさについてもきれいさが21%、どちらともいえないが79%であり、きたないと答えた人は0だった。図4の公園として利用した人とは、明確に水辺に対する印象が違う結果となった。

4. おわりに

対立しがちな地元住民と市民団体が連携し中心になって計画し、それを地方自治体、学校(が支援してつくりあげたものといえ、地域連携のよい例であると考えられる。施工後には、住民が考えた通り、夏には毎日、小学生たちや親に連れられた幼児が川に足をつけて水遊びをしていた。また、水遊びする以外にも、散歩や公園としての利用も多く、文字通り地域の憩いの場となっている。

完成後の技術的な課題として、夏以後、雑草や藻が多く生えるのが見られたため、これらによって近隣住民は川がきたないと感じており、川がきたないと「満足度」がなく、水遊びの妨げになることが分かった。一方で、川辺での水遊びを楽しむ市民がおり、それらの人は、幸町公園を水遊びしやすく、川もきたないとは思っていないことも分かった。

今後の維持管理やこの場をよりよく活用してもらうための活動は、この公園をつくったのと同様、地元住民と市民団体を中心に、自治体や学校などが協力して、続けていかなければならないと考えており、そのために、多くのグループがその都度、協力してできる時にできることをしようという、連絡会を設置して、今後の活動を行おうとしている。

謝辞: 本論文は、大阪府枚方土木事務所の協力により作成することができました。敬意と感謝を表します。

参考文献

- 1) 澤井健二ら：環境用水の創出に向けた地域的な取り組み，環境技術 39(12) pp.8-14, 2010.